

バスケットボールのゲーム分析

— 速攻について —

白 神 克 義

James E. Naismith (1861~1936) により考案され、83年の歴史を持つバスケット・ボール競技は、いくたのルール改正に伴い技術もより一層高度化され、洗練されたシュート技術と組織だてられたチームオフェンスにより、合理的かつ頭腦的な攻撃が行なわれるようになってきた。その裏には攻撃と対立関係にある防御との「追いかけて競争」において今日の発展があるものと思われる。

攻撃には速攻(ファースト・ブレイク)と遅攻(ディレード・オフェンス) 防御には個人防御(マン・ツウ・マン・ディフェンス)と地域防御(ゾーン・ディフェンス)があり今回取り上げた速攻は攻撃の1つであり、技術的レベルの高低をとわず、どのチームにおいても使用されております。速攻のチャンスは、ボールの所有が転換することにより、しかも転換が予期しえない状態であればあるほど攻撃成功率の高い攻撃とされております。

しかし、バスケット・ボールの専門書^{1), 2), 3)}などには、速攻についての解説はごく少なく、基礎技術、基礎プレー、チームプレーなどについてはかなりのページ数をとり論究している。これは速攻に対する研究不足でもあり、軽視でもあると思われる。

そこで本研究は、実際のゲームの中で、特に、基礎技術に視点を置き、速攻の技術構造および、その形成過程を明らかにするために行ったものである。

研究 方 法

期日 1972年11月24日~26日

対象 全日本学生バスケット・ボール選手権大会 決勝リーグ 進出8チーム、男子・中央大学、日本体育大学、明治大学、女子・日本体育大学、安城学園大学、大阪体育大学、武庫川女子大学

方法 男子5試合、女子2試合をV・T・Rに収録し、再生分析した。

- 1) 速攻⁴⁾として取り上げたものは、ボールを所有した瞬間、防御者が帰陣しようとするとき、又は、帰陣する前にスコアリング・エリアにボールを速く進めたものである。
- 2) 時間の計測は、ボールを保持してからシュートを打つか、ボールの保持を失うまでとした。
- 3) 1回の基本攻撃回数は、ボールを所有してから防御に移るまでとした。

5)

基本攻撃回数 = A + B + C

A = (相手チームの野投成功数) + (自由投の最後のスロー成功数)

B = 防御中にボールの所有を奪取した回数 = (f) + (g) + (h)

(f) = 防御のリバウンド・ボール獲得数

(g) = インターセプトした回数

(h) = 防御中のジャンプ・ボール獲得数

C = 相手の攻撃中のルール上のミス・プレーの回数 = (i) + (j) + (k) + (l)

(イ)=種々のバイオレーション

(ロ)=ライン・アウト (味方のアウト・オブ・バウンズ)

(ハ)=攻撃中のファウル

(ニ)=テクニカル・ファウル

攻撃回数=基本攻撃回数+D+E

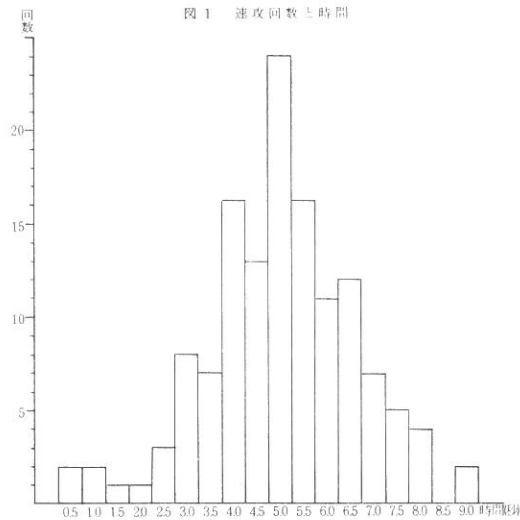
D=攻撃のリバウンド・ボール獲得数

E=攻撃中のジャンプ・ボール獲得数

結果と考察

1. 速攻における時間

男子が1回の速攻に要した時間は平均5.1秒(最高8.8秒,最低1.2秒)女子は平均4.8秒(最高8.9秒,最低0.4秒)であった。男女合せると図Iに示すごとく,平均5.0秒,標準偏差±1.66秒の分布を描いている。9秒以上は速攻の分野からはずれ遅攻となり,男子の遅攻平均時間は19.8秒と比較すれば,1回の遅攻で4回の速攻が行なえることになる。時間的に短い速攻は,ミス・インターセプトによるもので,ワンマン速攻となっており,パスはワン・ハンドによる長距離のパスとなっている。



2. 基本攻撃回数および速攻回数・速攻率

(A) 基本攻撃回数

ボールを得た状態,即ち,防御から攻撃に転換した時点をも7種類に分けた。㊦野投および自由投不成功時の防御側リバウンド・ボールの獲得,㊧攻撃側の種々のバイオレーション,㊨種々のミス・プレーおよびインターセプト,㊩野投および自由投の成功後,㊪攻撃中のファウル,㊫ルーズ・ボールの獲得,㊬ジャンプ・ボールの獲得,以上7種類について,チーム別に基本攻撃回数をまとめたのが表Iである。各チームを通して最も多いのがシュート成功後で457回と全体の48%を占めている。次にリバウンド・ボールの224回,ミス・インターセプト,バイオレーションの順となっている。チームの強弱に関係なく,ボールの所有は同等であり,

1回のボールの所有で、必ず1回のシュートができる。しかし、実際のゲームでは、1回のボールの所有で何回もシュートができるときもあれば、1回もシュートしないでボールを失うこともある。一定時間内での得点の相対比を争う競技である以上ボールはシュートで失わなければ相手には勝てない。女子・武庫川女子大学対大阪体育大学の試合で、シュート成功後からの攻めが武庫川42回、大阪体育13回と武庫川が多い。これは相手に42回も野投および自由投を入れられているということである。ミス・インターセプトでは逆に、大阪体育が相手の倍32回も攻めている。これは、技術の優劣が明確に表われている証拠である。ゲームが接戦すればするほど、回数之差はなくなる。そこで勝敗を決するのは、ルール上のミス・プレーの回数が少なく、ボールの所有を奪取した回数が多いゲームが勝利を収める。

表I 総基本攻撃回数

性・チーム名 ボールの所有	女 子				男 子								計		
	武庫	大休	安城	日体	中央	日体	明治	日体	明治	日大	日体	日大		中央	明治
リバウンド・ボール	15	27	20	19	15	18	20	21	14	7	13	11	14	10	224
バイオレーション	6	8	3	8	5	2	3	2	5	5	4	7	4	3	65
ミス・インターセプト	15	32	6	10	9	14	6	4	8	6	15	9	1	7	142
シュート成功後	42	13	34	28	37	35	25	33	33	43	23	28	42	41	457
ファウル	3	1	3	2	4	0	7	2	1	2	3	5	3	2	38
ルーズ・ボール	1	0	1	1	0	0	2	1	2	1	2	0	1	0	12
ジャンプ・ボール	0	3	2	1	2	1	2	0	2	0	2	3	1	3	22
計	82	84	69	69	72	70	65	63	65	64	62	63	66	66	960

註 武庫=武庫川女子大学、大休=大阪体育大学、日体=日本体育大学、安城=安城学園大学
中央=中央大学、明治=明治大学、日大=日本大学の略である。

(B) 速攻回数・速攻率

速攻回数・速攻率を表IIに示した。女子の総基本攻撃回数は304回で、そのうち65回の速攻が見られ、速攻率21.4%、65回の速攻のうちリバウンド・ボール、ミス・インターセプトが45回で全体の70%を占め、次に、シュート成功後、ジャンプ・ボール、バイオレーション、ルーズ・ボールとなっている。項目別に、基本攻撃回数に対する速攻回数の比率を、検討すれば、ジャンプ・ボールが最も高く83%、ルーズ・ボール67%、ミス・インターセプト35%の順となっている。シュート成功後の基本攻撃回数が多いにもかかわらず、速攻率においては7%の低い値を示している。

男子の総基本攻撃回数は656回、そのうち69回の速攻が見られ、速攻率10.5%、69回の速攻のうち、ミス・インターセプト、リバウンド・ボールが53回で77%と女子とほぼ同じような傾向を示している。次に、ルーズ・ボール、シュート成功後、バイオレーションの順となっている。項目別に速攻率を見ると、ルーズ・ボールの67%が最も高く、ミス・インターセプト、リバウンド・ボールとなっている。男・女合せて見ると、総基本攻撃回数960回のうち、速攻は134回見られ速攻率14%、速攻の回数ではリバウンド・ボール、ミス・インターセプトがどちらも49回で、全体の73%と最も多く、項目別での速攻率では、ルーズ・ボールの67%、ミス・インターセプトの35%、ジャンプ・ボールの32%となっており、シュート成功後の3%が低率で目立っている。又、ファウルからの攻撃が女子で9回、男子で29回、総数において38回もあり、ルーズ・ボールの12回、ジャンプ・ボールの22回よりも上回っており。しかし、速攻回数

において全然見られないのは注目するところである。ファウルの場合は、ボールがデッドであり、時間は止まっている。しかも、ファウルが起った最も近いサイドラインより、審判がボールを手渡し、味方のプレイヤーがボールに触れたとき、始めてプレイが再開されるため、他の場合と異なり、選手の意志で速く攻めようとしても、攻められないためと思われる。

表Ⅱ 速攻回数・速攻率

回数(率)	女 子		男 子		総基本 攻撃回数	全速攻 回数(%)	シュート 成功率(率)
	基本攻撃回数	速攻回数(%)	基本攻撃回数	速攻回数(%)			
リバウンド・ボール	8 1	23 (28)	1 4 3	26 (18)	2 2 4	49 (22)	2 (43)
バイオレーション	2 5	5 (20)	4 0	3 (8)	6 5	8 (12)	2 (25)
ミス・インターセプト	6 3	22 (35)	7 9	27 (34)	1 4 2	49 (35)	29 (59)
シュート成功後	1 1 7	8 (7)	3 4 0	(2)	4 5 7	13 (3)	8 (62)
ファウル	9	0	2 9	0	3 8	0	0
ルーズ・ボール	3	2 (67)	9	6 (67)	1 2	8 (67)	2 (25)
ジャンプ・ボール	6	5 (83)	1 6	2 (13)	2 2	7 (32)	6 (86)
計	3 0 4	65 (21.4)	6 5 6	69 (10.5)	9 6 0	134 (14)	68 (51)

註 ()内は%

3. 速攻におけるパスの使用状況

速攻の形成過程を「はじめ」「つなぎ」「つめ」の3領域に分類し、「はじめ」とは、ボールを保持して、パスかドリブルをするまで、「つなぎ」とは、その中継であり、「つめ」とは、シュートする体勢を作るときまでとした。パスは6種類に分類し、それぞれの領域での回数を表Ⅲに示した。パスの種類の中、ショルダーパスは、回数が少ないので、ワン・ハンド・パスの中に入れた。「はじめ」における男子、女子のパスの計とドリブルとを加えると速攻数になるが、女子の場合はインターセプト後すぐシュートしたケースが3回あるので62回となっている。

「はじめ」の段階では、男子で総計40回、女子で総計32回のパスが使用されており、男子では、そのうちチェスト・パスが25回(63%)で最も多く、次に、ワン・ハンド・パス、オーバー・ヘッド・パス、アンダー・ハンド・パスが同率を示している。女子では、チェスト・パスが17回、以下、ワン・ハンド・パス、アンダー・ハンド・パスが同数で、次に、オーバー・ヘッド・パスの順となっている。計においては、男子、女子とほぼ同じような傾向であり、チェスト・パスが最も多く使用されている。「つなぎ」の段階では、男子はチェスト・パス、女子はワン・ハンド・パス、次にチェスト・パス、バウンス・パスの順となっており、チェスト・パスの減少により、他のパスの使用が増加している。全体的には、チェスト・パスが47%と、高い比率を占めている。「つめ」の段階では、チェスト・パスの頻度が減り、バウンス・パスの増加をきたしている。「はじめ」の段階でのパスは、防御の当たりが弱いため、チェスト・パスが多用されているが、「つめ」の段階では、防御の当たりが強くなり、チェスト・パスの減少をきたしたのであろう。速攻の理想的な型は相手をアウト・ナンバーにすることにあり、攻・防の関係は、2対1、3対2となり、防御をつけてのパスとなるため、バウンス・パスの使用が効果的なものとなっている。速攻に使用されたパスの総数から見れば、やはりチェスト・パスが多く202回中100回(50%)を占め、次に、ワン・ハンド・パスの43回(21%)となっている。

表Ⅳにパスおよびドリブルの全試合における総数を示した。パスの使用は防御の方法、即ち、オール・コート・マン・ツー・マン・ディフェンスか、ハーフのマン・ツー・マンか、プレス・ディフェンスか、ゾーン・ディフェンスかにより変化するものである。今回は、その分析をしていない。パスの総数は4,970回で平均335回の使用が見られる。パスの種類ではチェスト・パスが最も多く2,811回、中でも男子・日体は相手チームに比べて使用度が高い。次はオーバー・ヘッド・パスで801回、中でも女子・大体は相手よりも長身者が多いため、このパスの使用度を高めている。速攻に使用されたパスと比較すれば、チェスト・パスが2,811回中100回で3.6%、ワン・ハンド・パスが9.6%、オーバー・ヘッド・パスが2.3%、アンダー・ハンド・パスが4.6%、バウンス・パスが5.3%、手渡しパスが1.6%となっており、ワン・ハンド・パスの比率が高い。

表Ⅲ 速攻の形成過程における、パスおよびドリブルの使用状況

パスの種類・ドリブル	形成過程			はじめ			つなぎ			つめ			総計		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
パス	チェスト	25	17	42(58)	28	13	41(47)	9	8	17(40)	62	38	100(50)		
	ワン・ハンド	5	5	10(14)	6	18	24(28)	6	3	9(21)	17	26	43(21)		
	オーバー・ヘッド	5	3	8(11)	2	4	6(7)	1	3	4(9)	8	10	18(9)		
	アンダー・ハンド	5	5	10(14)	1	1	2(2)	2	2	4(9)	8	8	16(8)		
ス	バウンス	0	1	1(1)	3	10	13(15)	4	5	9(21)	7	16	23(11)		
	手渡し	0	1	1(1)	0	1	1(1)	0	0	0	0	2	2(1)		
パスの計			40	32	72	40	47	87	22	21	43	102	100	202	
ドリブル			29	30	59	25	34	59	39	23	62	93	87	180	

註 1.()内は%

2. ボールを獲得してドリブルだけでシュートまで行った場合は、「はじめ」のみドリブルを1回とし「つなぎ」、「つめ」には回数を入れていない。

表Ⅳ パスおよびドリブルの使用総数

パスの種類・ドリブル	チーム名	女子				男子								計		
		安城	日体	武庫	大体	明治	日大	日体	明治	日大	日体	中央	明治		中央	日体
パス	チェスト	154	157	145	151	179	318	234	153	199	272	184	210	169	286	2,811
	ワン・ハンド	33	27	58	42	44	15	9	46	48	20	23	40	27	18	450
	オーバー・ヘッド	76	41	78	107	43	65	40	50	62	61	40	50	49	39	801
	アンダー・ハンド	32	18	35	20	34	16	31	27	27	18	25	33	12	23	351
ス	バウンス	25	29	18	38	47	21	22	26	26	19	26	59	29	44	433
	手渡し	8	15	4	1	10	5	8	3	3	6	2	17	8	30	124
パスの計		328	287	338	359	357	440	344	365	365	396	300	409	294	440	4,970
ドリブル		189	175	147	174	187	128	219	203	203	135	164	190	158	282	2,532

4. ドリブルの使用状況

パスの分類と同様「はじめ」「つなぎ」「つめ」の3領域にて、表Ⅲの下段に示した。ドリブル⁶⁾には、時間的に短いもの、長いもの、又は、ワン・ドリブル、トゥ・ドリブル等に分けられるが、ここでは、時間に関係なく、ドリブルを開始して止めた場合を1回として数えた。「はじめ」の段階よりドリブルをしてそのままシュートしたのが、男子7回、女子8回あった。ドリブルの使用状況は3領域に渡り、男・女の差が見られ、女子では「つなぎ」に多用し、男子では「つめ」に多用している。男子の「はじめ」の段階で29回のドリブルが使用され、そのうち、ワン・ドリブルしてのパスが6回、トゥ・ドリブル以上してのパスが16回、ドリブルのみでシュートに持っていったもの7回となっており、中でもワン・ドリブルしてのパスは態勢を整えるためのものが多く、使用回数の減少が望まれる。速攻におけるパスとドリブルの回数では、パス202回、ドリブル180回とあまり大差は見られない。表Ⅳのドリブルの使用総数では、各チームとも平均181回、最高は男子日体の282回、最低は男子日大の128回である。パスの総数4,970回と比較すれば、ドリブルの倍近く使用されている。

5. 速攻におけるシュート

シュートをレイ・アップ・シュート、ジャンプ・シュートに分け表Ⅴに示した。男子、女子とも回数においてはジャンプ・シュートが多く、中でも女子の使用度は高い。成功数においては、男子はレイ・アップ・シュート、女子ではジャンプ・シュートとなっている。成功率からは、男子67%、女子55%と男子が高い。シュートの種類では、レイ・アップ・シュート77%、ジャンプ・シュート52%で、レイ・アップ・シュートが高い。レイ・アップ・シュートは、インターセプト等によるワン・マン速攻でゴールに接近してのシュートとなるため率を高めているのであろう。

シュートに結びつかなかったケースが23回あり、そのうち、男子が9回、女子が14回あった。その内訳は、チャージングによるファウルが8回、ミス・プレーが4回、トラベリングが4回、その他が4回あり、攻めのまざさがうかがえる。表Ⅱの最後の項に示したシュート成功数を項目別に検討すれば、ミス・インターセプトが最も多く29回で59%の成功率を占め、次にリバウンド・ボールで21回、43%の成功数を占めている。他は回数においてわずかではあるが、成功率の最も高かったのは、ジャンプ・ボールで86%、野投成功率の高い攻撃となっている。全体の成功率は134回中68回で50%となっている。

表Ⅴ 速攻におけるシュートの種類および成功数・成功率

種 類	回 数			成 功 数 (率)		
	男	女	計	男	女	計
レイ・アップ・シュート	28	15	43	23(82)	10(67)	33(77)
ジャンプ・シュート	32	36	68	17(53)	18(50)	35(52)

註 1.()内は%

2. 134回の速攻のうち、シュートに結びつかなかったのは23回あった。

要 約

「速攻はボールの所有の転換があったその瞬間にスタートし、ボールを防御者の帰陣より速くスコア・リング・エリアに進め、アウト・ナンバーの形でシュートに持って行く」という前提のもとに、分析し検討した結果、

- ① 速攻平均時間は5秒±1.66秒。
 - ② 速攻成功率は50%。
 - ③ 速攻の機会の多いのは、相手方にシュートを決められたあとのエンド・ラインからの速攻と、リバウンド・ボール獲得からの速攻と、ミス・プレイとインターセプトからの速攻であり、回数の多いのは、ミス・プレーとインターセプトからの速攻と、リバウンド・ボール獲得後の速攻であり、成功率の高いのは、ジャンプ・ボールからの速攻である。リバウンド・ボール獲得とシュートを決められたあとのエンド・ラインからの速攻は練習の成果がその成否に大きく影響するから、今後より一層の練習が期待される。
 - ④ 速攻に使用されたパスは「つめ」で「はじめ」「つなぎ」よりも減るが、ドリブルは「はじめ」「つなぎ」「つめ」とも使用回数にはあまり差がない。
 - ⑤ シュートに持って行くまでに起る（技術上のミスによる）速攻の失敗が多い。
- 以上の5点に要約される。今後の課題として、防御の状態と速攻の形（ワン・マンか、2線か、3線か、側線か）、技術の高・低の段階に分け研究していくつもりである。

参 考 文 献

- 1) 吉井四郎 バスケット・ボール教室 192~194 (1970)
- 2) 伊藤順藏他 バスケット・ボール 230~232 (1974)
- 3), 4) Frank McGuire team basketball offense and defense 22~30 (1966)
- 5) 牧山圭秀他 図説バスケット・ボール事典 437 (1969)
- 6) John M. Cooper The Theory and Science of Basketball 31~38 (1970)